展示資料解説

ブレイク刷る―!

ページが語る印刷技術の歴史

第３４回関西館資料展示

国立国会図書館
National Diet Library, Japan

木版から、活版、ガリ版、オフセット印刷まで、印刷の歴史をたどる旅へ！
商業出版が始まった近世から現在まで、紙の本は私たちの生活に当り前のものとして存在し続けています。それを支える印刷も、時代ごとに新たな技術を取り入れ、進歩し続けてきました。

本展示では、近世から現在にかけて進歩してきた印刷技術に関する本、実際にその技術を使って印刷された本など、約 70 点の資料を紹介します。スマホ時代の今だからこそ、印刷された本が持つ“ものとしての魅力”を再発見してみませんか？

目次

第 1 章：近世以前の印刷　p.4
第 2 章：明治・大正の印刷　p.11
第 3 章：昭和・平成の印刷　p.18
印刷方法の解説　p.31

凡例

・展示の順番にしたがって資料の情報を掲載しています。

・書誌情報は「タイトル / 編著者名等. 出版者, 出版年月日等」の順に記載しています。【　　】内は資料の請求記号です。

・★印は、デジタル化資料の原本であることを示しています。デジタル化資料は国立国会図書館デジタルコレクションでご覧いただけます。公開範囲は資料により異なりますが、館内の端末からは全て閲覧可能です。

<デジタル化資料を閲覧するには>

・国立国会図書館サーチ（ https://ndlsearch.ndl.go.jp/ ）で、ご覧になりたい資料の請求記号やタイトルなどにより資料検索を行い、検索結果の画面で「収録元データベースで確認する」のボタンをクリックしてください。

・または、国立国会図書館デジタルコレクション（ https://dl.ndl.go.jp/ ）で、ご覧になりたい資料の請求記号やタイトルなどにより資料検索を行ってください。

・各資料の公開範囲は、書誌事項の後ろに付した以下の表示をご確認ください。

インターネット公開	インターネット上で閲覧が可能な資料です。ご自身の端末（スマートフォン、タブレット、パソコン）などで閲覧できます。
館内／図書館・個人送信	国立国会図書館の館内の端末、および図書館向けデジタル化資料送信サービス に参加している図書館の端末で閲覧が可能な資料です。個人向けデジタル化資料送信サービス をご利用の方は、ご自身の端末（スマートフォン、タブレット、パソコン）などでも閲覧できます。
国立国会図書館内限定	国立国会図書館の館内の端末でのみ閲覧が可能な資料です。

第１章：近世以前の印刷

この章では、印刷全体の歴史が分かる資料と、近世の様々な印刷技術に関する資料を取り上げます。

日本の印刷の起源は奈良時代に遡ります。ページ全体を彫り込んだ板＝板木（はんぎ）に墨を塗って紙に押す、整版による木版印刷が長く行われてきました。加えて、文禄・慶長（1592～1615）頃に西洋や朝鮮半島から活字印刷の技術がもたらされました。この頃の活字で作られた書籍を古活字版（こかつじばん）と呼びます。しかし活字は当時の商業出版に向かず、近世を通じて整版による木版印刷が印刷の主流であり続けました。繊細な版を彫る技術は文字の印刷だけでなく、刷りを重ねる浮世絵などにも活用されました。

1　トコトンやさしい印刷の本 / 真山明夫 監修ほか. 日刊工業新聞社, 2012.12 【PE61-L2】

印刷技術の仕組みや変遷について解説した資料。凸版印刷、凹版印刷、平版印刷といった基本的な技術から、デジタル機器を活用したり、紙以外に印刷したりする最先端の技術まで解説しており、初学者にも分かりやすい。

2　日本印刷文化史 / 凸版印刷株式会社印刷博物館 編. 講談社, 2020.1 【UE82-M10】

日本において印刷は 1200 年以上の歴史があり、印刷と社会は相互に影響を与え合って発展してきた。展示資料は、日本の歴史全般と印刷史がどのように関連しているのかを説明したもの。社会的要請を受けて印刷が行われ、そこで生み出された印刷物が社会変容を引き起こす。そしてその変容によって印刷技術が変化する、というサイクルについて時代ごとに考察を試みている。

★3　日本語大博物館 ： 悪魔の文字と闘った人々 / 紀田順一郎 著. ジャストシステム, 1994.1　【KF35-E65】

国立国会図書館内限定

日本語は、活版印刷とは相性が悪いとされてきた。ひらがな・カタカナ・漢字が交じる複雑な表記法であり、さらに漢字は大量の種類がある上に画数が多いためである。展示資料には、日本語を印刷するための先人の様々な取組が記録されている。

「しんにょう」を異字体で彫ってしまい数万本の活字を無駄にする。写真植字に適した字体を作成するために 5 万字を 1 人の人間が手書きする。現在の日本語印刷が成り立つまでの過程にあった、これらの苦労を知ることができる。

4　日本語活字印刷史 / 鈴木広光 著. 名古屋大学出版会, 2015.2　【UE82-L18】

活版印刷により日本語の印刷表現がどのように変化したのかを考察した資料。西洋の活字をもとに中国で漢字に適した活字が開発されていく歴史を検討している。さらに、中国で開発された明朝体の鋳造活字が日本の印刷出版に普及したことにより、それまで出版物のジャンルや内容に応じて使い分けられていた書体やレイアウトが、画一化していく過程を論じている。

5　図説本の歴史(ふくろうの本) / 樺山紘一 編. 河出書房新社, 2011.7　【UM11-J43】

印刷技術の進歩と、書物の発展・普及は切り離せない関係にある。展示資料は、世界及び日本における書物の歴史を記述したもの。書物の誕生から近代活版印刷による爆発的な普及まで、印刷技術がどのように進歩してきたのかを理解することができる。宗教書や地図、教科書など様々な書物がどのように生まれ、普及したのか、近代活版印刷が登場する以前の印刷・出版文化の様相を知るための資料としても利用できる。

★6　出版文化と印刷 ： 活版から電子出版まで / 横山和雄 著. 出版ニュース社, 1992.10　【UE82-E5】

国立国会図書館内限定

著者は印刷に関する専門紙・誌の編集に携わっていた人物。写植が活版印刷に取って

代わり、ワープロも普及し始めた 1980 年代頃、技術の進歩が印刷・出版業界にどのような影響を及ぼしたのかが分かる資料である。出版物が世にあふれる中、休みなしで働く過酷な印刷業者を描いたエッセーからは当時の業界内部の状況が手に取るように分かる。印刷に関する資料らしく、巻末に、使用した用紙や印刷の仕様一覧が掲載されているのも面白い。

★7　土石に刻んだ絵文字から印刷ページまで ： 紙づくりと印刷の歴史 / マーガレット・コールマン・クーパー, 小成申祐 著ほか. ノース・パシフィック・ペーパー・コーポレーション, 1981　【PE23-4】

館内／図書館・個人送信

古代から近代活版印刷の普及に至るまでの歴史を解説した資料。文字と筆写材料が出会ったとき、社会や文化にどのような変化が起きるのかがメインテーマ。パピルスやパーチメント（羊皮紙）、紙がどのように各地に普及し、置き換わっていったのかという筆写材料の歴史についての記述が詳しい。石や木、布など紙伝来以前の様々な筆写材料の図や写真が多数掲載されており、視覚的にも楽しめる。

★8　活字文化の誕生 / 香内三郎 著. 晶文社, 1982.10　【UE82-10】

館内／図書館・個人送信

活版印刷受容後のイギリスにおける、社会と印刷・出版の関係を、活字文化を生んだ偉人のエピソードを織り交ぜて紹介する資料。教会での説教などの口承文化から印刷文化へと移行していく社会を取り上げている。ピューリタン革命やジャーナリズムの誕生などの当時の政治・社会情勢をテーマに、言論出版の自由と風刺や、新聞をはじめとするメディアの娯楽媒体から言論媒体への変化などを解説する。

9　書誌学談義江戸の板本(岩波人文書セレクション) / 中野三敏 著. 岩波書店, 2010.12　【UE17-J32】

江戸時代の印刷の主流は、文字や図を彫った木の板（板木）に墨を塗って紙に転写する木版印刷であった。木版印刷はすべての製作工程が人の手によるため、外型が全く

同じ板本（木版印刷された書物）は極めて少ない。そのため、板本における外型の差に着目して製作された年代を（相対的に）特定することは、どのような記述がどの時点で削除もしくは追加されたのかなど、内容の変動を知るための手がかりとなる。展示資料は板本の形態、材料、内容、伝来などを研究する際の基本知識を説明した資料である。

10　近世出版の板木研究 / 金子貴昭 著. 法藏館, 2013.2　【UE17-L6】

板本の研究をするためには、その板本のもととなった板木そのものについての研究も必要である。内容の修正痕や版権の変遷など、板本だけでは分からない、製作現場での情報が板木には含まれているからである。展示資料では、板木資料のデータベース化、アーカイブ構築の方法を交えながら、板木とはどのようなものなのかを明らかにし、板木観察の際のポイントや研究手法について解説している。

11　板木は語る / 永井一彰 著. 笠間書院, 2014.2　【UE17-L7】

板木研究の意義や成果について、これまで著者が中心となって収集してきた資料を研究対象として具体的に検討したもの。松尾芭蕉の関連資料を用いた、板木の仕立て方や板木の分割所有、重版（海賊版）、版面修正の方法などの考察が展開される。当時の出版・印刷業界にはどのようなルールがあり、現場でどのようなことが実施されていたのかが分かる資料である。

★12　字彫り版木師木村嘉平とその刻本(日本書誌学大系 ; 13) / 木村嘉次 著. 青裳堂書店, 1980.9　【UM24-8】

館内／図書館・個人送信

江戸時代中期から明治時代までの約 100 年間、五代続いた字彫り師・木村嘉平の一門について、五代目木村嘉平の長男が記した資料である。字彫り師とは、版木に文字を彫る職人のこと。代々の木村嘉平をはじめ、その弟子や同時代の字彫り師の評伝、作品の解説などがされている。近世から近代にかけての日本の印刷技術の変化が、一門の様々な業績や作品を通して垣間見える。

13　江戸の銅版画 / 菅野陽 著. 臨川書店, 2003.3　【KC165-H2】

銅版画及びその技法は、16 世紀にキリスト教とともに日本に伝わったものの、禁教令の影響により一度は途絶えた。それを再興したのは、江戸後期に蘭書から独学でエッチング技法を習得した司馬江漢である。展示資料は、著者の銅版画家ならではの観点から、司馬江漢、亜欧堂田善、安田雷洲を軸に、江戸期における代表的な銅版画家の技術と作風の相違を明らかにしている

14　江戸・明治の視覚 : 銅版・石版万華鏡 / 森登 著. 日本古書通信社, 2017.11　【KC227-M2】

『日本古書通信』に掲載されたコラムを 1 冊の本にまとめたもの。著者が長年にわたって収集した銅版・石版作品をもとに、それぞれの見どころや製作の背景などを解説している。図版も多く収録され、銅版・石版特有の精緻な描写を堪能することができる。

★15　原色浮世絵大百科事典 第 3 巻 / 日本浮世絵協会原色浮世絵大百科事典編集委員会 編. 大修館書店, 1982.4 【YP14-684】

国立国会図書館内限定

浮世絵とその関連分野の総合的かつ世界規模の事典で、全 11 巻からなる。多数の原色図版とともに、浮世絵の各種主題及び用語の解説を収録している。展示資料である第 3 巻のテーマは「様式・彫摺・版元」。このうち第 2 章「彫と摺」は、技術的側面に焦点が当てられ、版下（下絵をもとに絵師が描く最終稿）と完成版、初摺と後摺の比較など、一つの作品を様々な製作段階から鑑賞できる。浮世絵版画が、版元、絵師、彫師、摺師などの共同作業によって完成する、一種の総合芸術であることを実感する 1 冊。

16　代表作でわかる浮世絵 BOX / 太田記念美術館 編・著. 講談社, 2024.11 【KC172-R13】

浮世絵の始祖とされる菱川師宣の作品から近年注目を集める新版画まで、浮世絵師55 名の代表作 115 点をオールカラーで収録し、それぞれの様式、製作時期、所蔵機関及び解説を付す。また、時代ごとの特徴や代表絵師に関する解説も充実し、著名な浮世絵の見どころをおさえることができる。編著者の太田記念美術館は、東邦生命保険相互会社社長などを務めた 5 代目太田清藏（おおたせいぞう）のコレクションを中心に 15,000 点以上を収蔵する浮世絵専門美術館である。

17　もっと知りたい浮世絵 / 田辺昌子 著. 東京美術, 2019.12　【KC172-M17】

著者は、千葉市美術館の学芸課長兼副館長（当時）であり、浮世絵の研究家。浮世絵の魅力や製作背景を解説する入門書で、一般読者や美術初心者を主な対象としている。浮世絵の始まりと広がりをまとめた「浮世絵のはじまりと流れ」、人気絵師とその作品を紹介する「浮世絵を彩る絵師たち」の 2 部構成。豊富なカラー図版を収録し、絵師の経歴や作風、作品のテーマ、構図、文化的・社会的背景、技法などを分かりやすく解説している。

18　パノラマ浮世絵「幕末･明治の東京･横浜風景」/ 阿部出版, 2019.2 【KC16-M78】

幕末から明治にかけて、東京の建築物や乗り物、洋服姿などを描く「開化絵（開化錦絵）」、横浜の港の景観や珍文物を描く「横浜錦絵（横浜浮世絵）」が盛んに製作された。それらの作品の多くは続絵（つづきえ：複数の版画を並べて一つの画面を構成する浮世絵版画）であり、その迫力、パノラマ観が大きな人気を博した。展示資料は、開化絵 123 点、横浜錦絵 68 点を収録。大きく変貌する幕末・明治期の東京、横浜の風景が、鮮やかな色彩でダイナミックに表現されている。

19　上方歌舞伎と浮世絵/ 北川博子 著. 清文堂出版, 2011.12.　【KD481-J73】

浮世絵製作の中心地といえば江戸であるが、上方にも浮世絵、いわゆる「上方絵」が存在していた。展示資料は、江戸時代の上方における歌舞伎と浮世絵を通して、上方文化の独自性を再認識することを目的としている。上方絵の歴史に加え、大阪と京都で製作された浮世絵の違い及びその文化的・経済的背景に関する論考も興味深い。著者は上方絵研究の第一人者。

第２章：明治・大正の印刷

明治時代に入ると、それまでの木版印刷に加え、活版印刷、銅版印刷、石版印刷などの新技術が盛んに取り入れられました。

金属で作った棒状の活字を並べて使う洋式の活版印刷技術は、日本の活字印刷術の祖と呼ばれる本木昌造によって確立されました。現在も一般的な明朝体は、本木昌造により活字書体として採用されたものです。

銅版印刷は精緻な表現が可能なことから、偽造防止のため、紙幣や切手など政府の印刷物で活用されました。石版印刷は、鮮やかな色彩や細かい濃淡により、画像を写実的に表現することが可能です。また、写真を金属の板に焼き付けて印刷する写真凸版も普及しました。

さらに大正期になると、大衆文化が花開くとともに、グラビア印刷やオフセット印刷など、より大量に作ることができる技術が導入されていきました。

20　木口木版のメディア史 ： 近代日本のヴィジュアルコミュニケーション / 人間文化研究機構国文学研究資料館 編. 勉誠出版, 2018.3　【KC227-L5】

木口木版とは、木材を輪切りに切り出した横断面を版とする木版技法で、きわめて細い線を印刷することができる。

展示資料は明治期に木口木版を発展させた合田清と、彼が設立に関わった工房兼画塾である生巧館に注目し、木口木版が新聞・雑誌・書籍などの中の視覚表現に果たした役割を考察している。

21　もっと知りたい川瀬巴水と新版画(アート・ビギナーズ・コレクション) / 滝沢恭司 著. 東京美術, 2021.6　【KC227-M3】

町田市立国際版画美術館の学芸員だった滝沢恭司が著した「新版画」の入門書。代表的作家である川瀬巴水の作品や制作背景をメインに新版画の魅力をわかりやすく解説している。著者による図版への細やかなコメントにも注目。

22　最後の版元 ： 浮世絵再興を夢みた男・渡邊庄三郎 / 高木凛 著. 講談社, 2013.6　【KC229-L32】

明治から昭和にかけて活動した版元・渡邊庄三郎の生涯を描いた評伝である。衰退した浮世絵版画を新版画として近代に蘇らせた渡邊の挑戦と情熱が、彼と関わった画家たちのエピソードとともに描かれている。著者は脚本家としても知られる人物。

23　日本の近代活字 ： 本木昌造とその周辺 / 『日本の近代活字本木昌造とその周辺』編纂委員会 編著. 近代印刷活字文化保存会, 2003.10　【UE82-H6】

24　本木昌造と日本の近代活字 / 高橋律夫 編. 大阪府印刷工業組合, 2006.9　【UE82-H18】

平成 11（1999）年に本木昌造顕彰会、印刷博物館、株式会社モリサワによって「本木昌造・活字復元プロジェクト」が発足した。その集大成として刊行されたのが《資料番号 23》であり、これを普及版として再編集して刊行したものが《資料番号 24》である。日本の活版印刷術の創始者・本木昌造の功績など、活字に関するトピックを多角的に紹介している。図版も豊富で読みやすく、長崎の諏訪神社が収蔵している初期の種字（活字の型）を掲載したページはひときわ興味深い。

25　本木昌造伝 / 島屋政一 著. 朗文堂, 2001.8　【GK87-G59】

本木昌造の生涯と業績を記した島屋政一の未発表原稿を、朗文堂が編集・発行した 1 冊である。和文活字の確立や西洋式印刷術導入に尽力した本木昌造の足跡を、豊富な資料で追っていく。背表紙に濃紺特染めの革を使うなど、こだわりの造本も見どころの一つで、印刷文化への敬意が感じられる。

26　活字印刷の文化史 ： きりしたん版・古活字版から新常用漢字表まで / 張秀民, 大内田貞郎, 豊島正之, 鈴木広光, 小宮山博史, 宮坂弥代生, 佐賀一郎, 劉賢国, 孫明遠, 内田明, 小形克宏 共著. 勉誠出版, 2009.5　【UE82-J5】

活字印刷の歴史について、11 名の著者が多角的に書く 1 冊。16 世紀のキリシタン

版から、江戸期の古活字版、明治以降の活版印刷、そして現代の常用漢字表までを対象としている。活字印刷という軸を持ちつつも、分野・専門の異なる著者がそれぞれの着眼点から論じており、章ごとに個性が光る。

27　日本語活字ものがたり ： 草創期の人と書体 / 小宮山博史 著. 誠文堂新光社, 2009.1　【UE82-J3】

明治初期に欧文活字を模範としながら発展した和文活字について、印刷・書体・出版など色々な視点からエピソードを紹介する。著者の集めた貴重な資料の図版や、注目されにくい種字彫師へのインタビューも展示資料の特色の一つ。

28　明朝活字の美しさ ： 日本語をあらわす文字言語の歴史 / 矢作勝美 著. 創元社, 2011.11　【YP21-J1】

日本語を記す代表的な書体である「明朝体」の成立と変遷について述べた本。明治期の活版印刷から現代のデジタルフォントまで、様々な媒体で使われてきた明朝体の歴史を通観する。

29　明朝体活字: その起源と形成 / 小宮山博史 著. グラフィック社, 2020.9　【UE82-M9】

日本語印刷における明朝体の誕生と定着の過程を、膨大な資料と図版をもとに精緻に分析。明朝体の美しさや技術的工夫にも迫る。

30　大日本印刷株式会社史 ： 七十五年の歩み(社史で見る日本のモノづくり ; 第8巻) / [大日本印刷株式会社] [編]. ゆまに書房, 2003.1　【DH22-H178】

大日本印刷株式会社が創業 75 周年を記念して昭和 27（1952）年に発行した社史を、外装を改めてゆまに書房が復刻した本。当時の書体をそのままに、同社の技術革新と事業展開の歴史をたどる。巻頭に収録されている印刷風景の写真も見どころ。

31　凸版百年 ：凸版印刷株式会社百年史 / 凸版印刷株式会社百周年記念事業推進委員会 編纂ほか. 凸版印刷, 2001.6　【DH22-G652】

平成 12（2000）年の創業 100 周年を記念して編纂された企業社史。1 世紀に渡る自社の印刷技術の変遷に、当時の文化・産業・社会との関わりを絡めて書く。当時の施設や印刷した製品の写真も多く掲載されている。

32　発明に見る日本の生活文化史. 本シリーズ 第１巻 (活字) /ネオテクノロジー, 2014.12　【M351-L288】

明治から第二次世界大戦前までの発明を、特許明細書（特許出願に際して願書に添付する、発明の内容等を記載した文書。）とともに紹介するシリーズの 1 冊。展示資料は「活字」がテーマ。様々な特許事例から、活字に関連する技術の進化を知ることができる。日本語の活字は数十万種類にも及んだため、収納などで工夫が求められた。立ちっぱなしの文選作業は非常に過酷で健康障害をもたらすほどであった。そのことが、座ったまま作業できるコンパクトな活字収蔵器の発明の理由として特許明細書に記述されていると紹介されている。

33　発明に見る日本の生活文化史. 本シリーズ 第 2 巻 (印刷) / ネオテクノロジー, 2014.12　【M351-L289】

《資料番号 32》と同じシリーズで、展示資料は「印刷」がテーマ。印刷の用途の広がりを、感じ取ることができる資料である。鉄道乗車券、折込新聞紙、名刺などに特化した印刷機をはじめ、当時の様々な特許明細書が掲載されている。

★34　新塾余談. 初編 / 本木咲三. 新塾活字製造所, 明 5.2　【特 43-226】

インターネット公開

明治 5（1872）年刊行。本木昌造が別名の本木咲三で著し、自ら設立した新町活版所で刊行した。幕末から次第に試みられるようになってきた活版印刷の初期の様子を伝える資料である。巻末などに載る様々な大きさの「天下泰平國家安全」は、日本初の鋳造活字の見本広告である。

★35　官員名鑑. 明治 10 年 10 月 / 神崎正誼. 弘道軒, 明 10-11　【14.1-6】

インターネット公開

神崎正誼（かんざきまさよし）が設立した活字製造所「弘道軒」の作った「弘道軒清朝体（こうどうけんせいちょうたい）」という楷書体が使われた役人名簿である。当時は明朝体よりも筆文字に近い楷書体の方が一般になじみ深かったため、弘道軒清朝体は広く使われていた。

★36　朝陽閣鑑賞. 錦繍之部 / 大蔵省印刷局. 大蔵省印刷局, 明 16.7　【7-239】

インターネット公開

明治時代、大蔵省印刷局によって石版印刷で作られた資料。様々な美しい古裂（こぎれ）を紹介している。石版印刷は石灰石の上に油性の薬剤で絵を描き、水と油の反発を利用して印刷を行う。当時印刷局は、日本美術の記録を目的に、色彩やグラデーションの表現にすぐれた石版印刷による出版を試みていた。加えて、石版印刷技術の継承や習得といった意図もあった。

★37　なみまの錦 / 大蔵省印刷局. 大蔵省印刷局, 明 17.2　【400-81】

インターネット公開

《資料番号 36》と同じく、明治時代、大蔵省印刷局によって作られた資料。石版印刷により、色々な食用魚の姿が精巧に表されている。前書きには、魚の図鑑はたくさんあるが図画が細かくないものばかりなので、日々の利用に便利なように作られたとある。巻末に各魚の特徴や味の説明が付されているのも興味深い。

★38　輿地誌略. 巻 11 / 西村茂樹編. 修静館, [明 10]　【6-231】

インターネット公開

『輿地誌略』は、明治初期のベストセラー地誌書である。明治 4（1871）年から明治 13（1880）年にかけて全 4 篇 12 巻出版され、挿図が木版、銅版画、石版画と印刷技法が変化していった。修静館版の挿図は、巻 10 から巻 12 までで銅版画と石版画が混在している。展示のアンデス山脈は石版画によるもので、欄外に「玄々堂石版部製造」の記述がある。

★39　日清戦争実記(8) / 博文館. , 1894-11　【雑 53-3】

国立国会図書館内限定

日清戦争開戦直後の明治 27（1894）年 8 月に創刊。写真技術を応用した写真凸版をいち早く取り入れた雑誌。報道写真の先駆でもあった。網目スクリーンを使って網点を作ることから、写真凸版は網目版とも呼ばれ、目を凝らすと、図には小さな点がたくさん集まっていることが分かる。日本における写真凸版の先駆者である堀健吉と、小川一真の二人が手掛けた。展示箇所の左ページ右下には「小川一眞写真彫刻銅板及印刷」との記載がある。

★40　日本百景 下 2 版 / 小川一真. 小川一真出版部, 明 29.7　【特 52-648】

インターネット公開

《資料番号 39》で紹介した小川一真が、写真凸版により製版。こちらの写真でも、小さな点がたくさん集まって図となっていることが見て取れる。展示の図のタイトルは、「山城宇治の茶摘」。ちなみに、小川一真は、旧千円札の夏目漱石の写真を撮影したことでも知られている。

★41　伊予鉄道沿線案内 / 関オフセット印刷部, 大正 13　【特 114-30】

インターネット公開

大正 13（1924）年にオフセット印刷により印刷、出版された。石版印刷の原理を使って生まれたオフセット印刷では、石版の代わりに金属版を使い、インキをまず刷版に付けてからゴムに移し、用紙に間接的に印刷する。ゴムにクッション性があるため印刷が鮮明になった。展示資料は、当時の伊予鉄道の路線図を鮮やかな色で表現している。各駅の観光案内も掲載しており、松山への旅情をかきたてられる資料である。

★42　高等科の図画 / 万富三 著. 宝文館, 昭和 2　【特 214-305】

インターネット公開

高等科図画教育の指導者向けの指南書であり、数種類の印刷方法で印刷された図を挿入している。展示箇所の「蝶の便化図」はオフセット印刷による。色も形も様々なデフォルメされた蝶がとてもかわいらしい。

第３章：昭和・平成の印刷

第二次世界大戦後、印刷物のビジュアル化やカラー化に伴い、画像の表現にすぐれたグラビア印刷や、刷版の扱いが手軽なオフセット印刷がさらに興隆していきました。

また文字の印刷に関連して、大正時代に開発された写真植字（写植）が本格的に普及しました。写植は、写真技術を使い、文字をフィルムなどに印字することで版を作る技術です。活字に比べ、新しい書体の作成、自由なレイアウトを可能にしました。

1980 年代末頃、アメリカから DTP（Desktop Publishing）が入ってきました。これは印刷に関わる各工程をコンピュータで完結させる方式です。やがて活字や写植に代わり、DTP とオフセット印刷の組合せが主流となっていきました。

一方で、個人の使える小規模な印刷用器具も発展してきました。

日本語を打てるタイプライターは大正時代に作られ、主に専門のタイピストによって使われました。1970 年代にワードプロセッサー（ワープロ）が現れ、一般にも普及しました。

手書きの文章や絵を印刷する手段としては、ガリ版（謄写版）が政治活動や教育の現場などで息長く親しまれました。これは版に孔をあけ、そこからインクをにじみ出させる孔版印刷という方式です。同じ方式による家庭用のハガキ専用プリンターも一世を風靡しました。

★43　朝日新聞グラビア小史 ： 出版印刷部 40 年の記録 / 朝日新聞社大阪本社社史編集室 編. 朝日新聞社, 1962　【070.17-A839a】

館内／図書館・個人送信

大正 10（1921）年から昭和 36（1961）年にかけて朝日新聞社内に存在した出版印刷部の社史的記録。グラビア印刷を日本国内で先駆的に導入してから廃止するまで

の、同社の事業や取組が紹介されている。
大正 12（1923）年に関東大震災が発生した際、朝日新聞社は被災地の様子を生々しく伝える写真集を出版した。これは、写真の再現が得意なグラビア印刷の特色・威力が遺憾なく発揮された出版物となり、グラビア印刷の飛躍のきっかけとなった。1960 年代以降は、グラビア印刷に比べて刷版が軽便で扱いやすいオフセット印刷の需要が高まっていき、朝日新聞社内でもグラビア印刷は打ち切られた。

44　サンデー毎日　1 巻 2 号/ 毎日新聞社, 1922.4.9　【雑 54-201】

『サンデー毎日』は、大正 11（1922）年 4 月 2 日に大阪毎日新聞社により創刊された雑誌。前年にアメリカから購入したばかりのグラビア印刷機による表紙が売りの一つであった。この時期、朝日新聞社と毎日新聞社は最初のグラビア印刷導入をめぐり激しく競いあっていた。《資料番号 43》には、当時の様子が生々しく書かれている。

★45　ベースボール・マガジン 第 1 次 7(10) / . ベースボール・マガジン社, 1952-10　【Z11-24】

国立国会図書館内限定

『ベースボール・マガジン』は、昭和 21（1946）年 4 月に創刊された野球雑誌。展示箇所では、「打撃の神様」と呼ばれた巨人の川上哲治選手の写真とともに、高品質なグラビア印刷のプレー写真に期待を寄せる読者の声を見ることができる。

★46　小説のふるさと / 林忠彦 著. 中央公論社, 1957　【748-H392s】

館内／図書館・個人送信

林忠彦は、文士のポートレートなどで有名な写真家。本作は名作小説の舞台となった土地の写真集である。細やかな濃淡を表現できるため高品質な画像に適したグラビア印刷は、こうした資料でもしばしば使われた。

★47　ゴッホ / 小林秀雄 著. 人文書院, 1958　【723.5-cG61Kg2】

国立国会図書館内限定

評論家・小林秀雄による著述と、ゴッホ作品の図版 63 点を収録した本。
冒頭の図版目次には図版ごとの印刷方式、奥付には各図版を担当した印刷会社が示されており、内容のみならず、画質にもこだわって製作されたことがうかがえる。
グラビア印刷による図版が多い中、p.37 の「葡萄の木のある裏庭」1 点のみオフセット印刷で、別の印刷会社が担当している。何らかの造本上の意図だろうか。

48　オフセット印刷技術 : 作業手順と知識　増補改訂版 / オフセット印刷技術研究会 編著. 日本印刷技術協会, 2009.4　【PE71-J10】

印刷業に携わる人向けに、現在の印刷方式の主流となっているオフセット印刷の基礎的な手順などをまとめた本。他の印刷方式が版から紙へインキを転写する直刷り方式であるのに対し、オフセット印刷は中間転写体を使う点が特徴である。これにより、版を左右逆にする必要がなくなる、中間転写体のクッション性により印刷が鮮明になるなどの長所がある。現在では、「水なし印刷」や「UV 印刷」など、様々なオフセット印刷が普及している。

49　オフセット印刷ブック : 印刷の知識と技術の継承 / 照井義行 著. 印刷出版研究所 (発売), 2007.9　【PE71-J1】

著者が、印刷会社で長年工場長を務めてきた経験をもとに、オフセット印刷についての自身の知識と経験を余すことなく凝縮した 1 冊。紹介されている内容は、「梅雨の季節に起こる紙のトラブル」「冬場のインキトラブル」など極めて多岐にわたり、豊富な写真や図とともに詳細に解説されている。

50　オフセット印刷サンプル BOOK : CMYK、リッチブラック、濃い墨、グロスニス、マットニス、金、銀、蛍光、白の印刷見本を各種の紙に。 / 『デザインのひきだし』編集部 編. グラフィック社, 2021.4　【PE71-M6】

オフセット印刷の印刷サンプル集。CMYK（シアン、マゼンタ、イエロー、ブラック）やニス、蛍光色、メタリック色、白などを、各種用紙に実際に刷った時にどのような色味になるのかをシミュレートできる 1 冊。

★51　誰にも判かる印刷物誂方の秘訣 / 三谷幸吉 著. 印刷改造社, 昭和 5　【608-197】

館内／図書館・個人送信

写真植字機は、大正 13（1924）年に石井茂吉と森沢信夫により開発された。

展示資料は印刷の基礎知識や見本を収めた本で、展示箇所には写真植字機の広告が掲載されている。様々な大きさと書体の文字を配置し、活用方法をアピールしている。

写植は次第に実用化され、映画の字幕などに使われた。しかし書籍などへの本格的な普及は戦後になってからのこととなる。

★52　写真植字機とともに三十八年 / 森沢信夫 著. モリサワ写真植字機製作所, 1960.8　【PE71-E12】

国立国会図書館内限定

森沢信夫による自伝。大正 12（1923）年に星製薬株式会社に入社し、石井茂吉とともに写真植字機の開発に携わるようになった頃から、モリサワ写真植字機製作所（現在の株式会社モリサワ）設立数年後までの歩みを振り返る。

★53　文字に生きる : 写研五〇年の歩み / 「文字に生きる」編纂委員会 編. 写研, 1975.11　【DH22-E473】

館内／図書館・個人送信

石井茂吉の設立した写研（当初の名称は写真植字機研究所）の 50 周年記念社史。写真植字機の開発、それを電算化した全自動写真植字機サプトンの開発に加え、様々な特徴ある書体デザインを作り出してきた歴史が述べられている。

54　技術者たちの挑戦 ： 写真植字機技術史 / 布施茂 編. 創英社/三省堂書店, 2016.5　【PE71-L12】

手動写真植字機の発明から 2000 年頃までの機器・システム、タイポグラフィなどの変遷について述べた本。著者は写研に勤務していた技術者で、機器カタログや会社 PR 誌など、一般的な刊行物として残りにくい文献までを広く参照して執筆している。

55　杉浦康平と写植の時代 = Kohei Sugiura and the Golden Age of Phototypesetting ： 光学技術と日本語のデザイン / 阿部卓也 著. 慶應義塾大学出版会, 2023.3　【PE71-M12】

杉浦康平氏は、多くのブックデザインを手がけたグラフィックデザイナー。本資料は彼と写植との関わりを考察した本である。杉浦氏は、文字の間隔や大きさを手動で調整し、視覚的により自然なレイアウトにする「詰め組み」という手法を効果的に使ったが、この手法と写植は相性が良かった。また、1970 年代、写研などにより開発された個性的な新書体の登場も相まって、日本語の文字がブックデザインの一環と考えられるようになっていった過程が詳細に論じられている。

56　時代をひらく書体をつくる。 ： 書体設計士・橋本和夫に聞く活字・写植・デジタルフォントデザインの舞台裏 / 雪朱里 著. グラフィック社, 2020.11　【KC531-M23】

書体設計士の橋本和夫氏のインタビュー。橋本氏は昭和 10（1935）年生まれで、活字、写植、デジタルフォントという三世代の技術にわたり書体の制作に関わってきた人物。日本語書体が時代とともにどのように変わってきたかを明らかにする、当事者ならではの貴重な証言録である。

★57　出帆 上 / 竹久夢二 著ほか. アオイ書房, 昭 15　【303-89】

館内／図書館・個人送信

竹久夢二による自伝的小説であり、戦前に写真植字機を使った本の例である。
本文は、明朝体をやや縦長にした独自の書体。活字でこのような本を印刷するには、同じ書体の活字を大量に用意する必要があるが、写真植字機では文字盤上の字をレンズ越しに撮影することで、拡大・縮小や変形が簡単に行える。アオイ書房は、酒販売店店主の志茂太郎が趣味で経営していた発行所。当時まだ目新しかった写真植字機を活用し、こうした凝ったデザインの出版物を作った。

★58　大漢和辞典. 巻 1 / 諸橋轍次 著. 大修館書店, 1955　【813.2-M875d-(s)】

国立国会図書館内限定

日本の代表的な漢和辞典。5 万字にも及ぶ漢字が収録されている。展示資料は、写植とオフセット印刷により刊行されたもの。序では、刊行に係る功労者として石井茂吉の名が挙げられている。

59　『大漢和辞典』の百年 / 池澤正晃 著. 大修館書店, 2023.12　【KF93-M22】

『大漢和辞典』の刊行をめぐる歴史を紹介した本。『大漢和辞典』は、昭和 18（1943）年に活版印刷で第 1 巻が刊行された。しかし戦災により活字や組版が焼失し、活字の再作成も困難となっていた。そこで大修館書店は、当時まだ書籍での使用が少なかった写植とオフセット印刷を活用して再度の刊行を行うと決定し、石井茂吉に膨大な原字の製作を依頼した。

★60　おもいっきりデスクトップ・パブリッシング (Asahi パソコン・シリーズ ; 4) / -. 朝日新聞社, 1987.1　【UE61-E7】

国立国会図書館内限定

DTP（DeskTop Publishing）を特集した本。DTP とは 1980 年代半ばに登場した電子編集システムで、原稿作成、レイアウト、整版、印刷などをパソコン上で完結させる方式。かつてはそれぞれを専門の会社に依頼する必要があったが、個人の机上（Desktop）で行えるようになった。DTP が日本に上陸して間もない時期に刊行さ

れた展示資料では、DTP により個人出版が容易になることを「新しいルネッサンス」と例える記事もあり、新技術に寄せられていた当時の期待が伝わってくる。

★61　森の書物 / 戸田ツトム 著. Gegraf, 1989.5　【UE65-E20】

国立国会図書館内限定

グラフィックデザイナーの戸田ツトムによる DTP の作例集。冒頭で「本書は、ほぼ全面的にパーソナル・コンピュータによって作られた本である」とあるとおり、執筆、編集、装丁などの作業を全てパソコンで行っている。図版や作図の例のほか、同じエッセーを様々なレイアウトにしてみせるなど、DTP の可能性を広く知らしめた。日本のフル DTP 出版物の草分け的存在である。

62　活字が消えた日 : コンピュータと印刷 / 中西秀彦 著. 中西印刷出版部松香堂書店, 2011.8　【DL675-J39】

京都にある老舗印刷所での、活版印刷を全廃してコンピュータによる印刷を導入するまでの動きをまとめた本。

コンピュータを用いた電算写植のような印刷方式は、必ずしも便利なことばかりではなく、活版のような細かい表現が難しいなどの問題点もあった。展示資料では、コンピュータを使いながらも、活版時代と同様の仕上がりを目指す職人たちの葛藤や試行錯誤が描かれている。

63　グラフィックデザイナーのための DTP&印刷しくみ事典 / 生田信一 [ほか] 著. ボーンデジタル, 2022.11　【PE61-M24】

印刷に関わる幅広い知識を、豊富な図版とともに紹介した本。印刷の仕組み、ハードウェアやソフトウェア、ワークフローやデザインなど、展示資料が出版された令和４（2022）年時点での DTP に関する最新知識を身につけることができる。エコロジーへの配慮や著作権といった、印刷技術そのものにとどまらない関連知識までをカバーしている。

★64　出版ニュース：出版総合誌（1092）/ 1977-10　【Z21-164】

★65　出版ニュース：出版総合誌（1093）/ 1977-11　【Z21-164】

国立国会図書館内限定

『出版ニュース』は、出版界の情報を掲載した旬刊誌。昭和 52（1977）年 11 月に、活版印刷からオフセット印刷へと移行した。展示しているのは活版印刷の最後の号、オフセット印刷の最初の号である。オフセット印刷が広く使われるようになっても、文字中心の出版物では活版印刷への愛着が長らく残っていた。本資料の印刷方法変更について、同時代には「下旬号の活版印刷文字の“切れ”の良さに対し、上旬号の“ベタ”ついた文字は、大きな変化」「文字印刷に限っていえば（中略）活版組版による直か刷り（原文ママ）が最も鋭くて良い」という評もあった《資料番号 6, p11》。活版印刷を見かける機会の減った現代の私たちから見て、両者の紙面の違いはいかがだろうか。

66　群像　64(12) 2009.12 /　【Z13-180】

67　群像　65(1) 2010.1 /　【Z13-180】

68　群像　80(5) 2025.5 /　【Z13-180】

『群像』は、昭和 21（1946）年 10 月に創刊された月刊文芸誌。

長らく活版印刷を使用してきたが、平成 22（2010）年にオフセット印刷に切り替え、さらに令和 7（2025）年に輪転機の老朽化によりインクジェットによるデジタル印刷へと切り替えられた。ここでは活版印刷の最後の号、オフセット印刷の最初の号、デジタル印刷の最初の号をそれぞれ展示している。活版印刷の号のページ表面を触ってみると、特有の凸凹が感じられる。

★69　和文タイプの打ち方 / 林武 著. 大泉書店, 1954　【809.9-H392w】

館内／図書館・個人送信

大正 4（1915）年、杉本京太が和文タイプライターを発明した。それは、日本語（漢字）の文字数の多さに対応するため、文字の使用頻度などから選択された 2400 文字を平面上の活字庫に並べ、1 本のタイプバーによって任意の活字をつまみ上げて

打字するという斬新な機構を有するものであった。
展示資料は、タイプライターの普及に伴い誕生した「タイピスト」の養成を念頭に置いたと考えられる資料である。タイピング技術だけではなく、機器のメンテナンスや、一般的な文章作成技法など、タイプライターの使用に必要な知識を幅広く解説しており、当時のタイピストが、専門技能を要する花形職業とされていたことも頷ける。

70　チャイニーズ・タイプライター ： 漢字と技術の近代史 / トーマス・S・マラニー 著ほか. 中央公論新社, 2021.5　【UC857-M1】

西洋のアルファベットをもとにつくられたタイプライターを中国に導入するには、膨大な漢字の数にどのように対応するかという大きな課題を克服する必要があった。展示資料は、その課題を解決するための様々なアイディア・技術競争から、戦時中における日本製タイプライターの中国市場独占と中国側の抵抗、入力や予測変換といった現在につながる技術の起源に至るまで、中国語タイプライターの発明史にとどまらない様々な話題が展開されている。

71　中文打字机 ： 一个世纪的汉字突围史 / 墨磊宁 著ほか. 广西师范大学出版社, 2023.1　【UC857-C1】

《資料番号 70》の中国語版。

72　ハングルタイプライターの開発がもたらした文字デザインの変化についての研究 / 劉賢国 [著]. [劉賢国], 2003　【UT51-2004-M79】

九州芸術工科大学に提出された博士論文で、ハングルタイプライターの開発がもたらした文字デザインの変化に関する研究成果をまとめている 。「第 2 章 ハングルタイプライター開発の歴史的変遷」では、ハングルタイプライターが初めて世に出た 1914 年以降の代表的なタイプライターとその特徴を、時代区分に沿って紹介している。

★73　考える道具 ： ワープロの創造と挑戦 / 古瀬幸広 著. 青葉出版, 1990.2 【NB151-E182】

国立国会図書館内限定

昭和 53（1978）年、かな漢字自動変換方式を採用した世界初の日本語ワードプロセッサである東芝の「JW-10」が発表された。展示資料には、かな漢字変換、キーボード配列、漢字の印刷などのワープロ開発の過程、各社の熾烈なコストダウン競争など、当時の様子が鮮やかに描かれている。また、ワープロ開発から 10 年後に行われた森健一氏、神田泰典氏（両氏は、東芝、富士通において、それぞれワープロ開発の中心的役割を担った。）などによる座談会の内容も収録している。

★74　日本語ワードプロセッサの活用法 / 山本直三 著. ビジネス・オーム, 1981.9　【NB151-3】

館内／図書館・個人送信

著者は、昭和 55（1980）年に日本で最初に開校した東芝日本語ワードプロセッサ・スクールの校長（当時）。同スクールでの体験と東芝のワープロ販売の経験を土台として、ワープロの特徴や使用法を具体的に解説し、その有用性を示す資料。「はじめに」において、展示資料は「日本語ワードプロセッサで書かれ、その出力がそのまま写真でとられ、出版された単行本としては、世界で初めての本ではないか」と述べられている。

75　地域情報マッピングからよむ東南アジア ： 陸域･海域アジアを越えて地域全体像を解明する研究モデル / 柴山守 著. 勉誠出版, 2012.3　【GE511-J26】

第 1 章「タイ語をよむヒトとコンピュータの<うごき>」では、『三印法典』（タイで 1350 年から 1805 年までに制定・公布された法令・布告を集めたタイ語資料）のコンピュータ用例索引を作成することを主目的とするタイ語ワープロの開発過程を中心に紹介している。分かち書きや単語の分類・排列の難しさ、文字の歴史的変遷、文字を美しく印刷するために必要な文字幅の適切な制御の必要性など、タイ語特有の課題を克服する過程が興味深い。

76　謄写版の冒険 ： 卓上印刷器からはじまったアート / -. 和歌山県立近代美術館, 2013.2　【Y121-L3115】

和歌山県立近代美術館で行われた同名展示のパンフレット。謄写版、通称「ガリ版」は、手技による簡易的な印刷技術として、明治時代に開発された後、広く社会に普及した。もともと個人の技量に左右される不安定な印刷技術と考えられていたが、逆にその点を個性ととらえることにより、優れた芸術作品を生み出す版画技法としても活用された。展示資料には、ガリ版を用いて制作された作品も多数掲載されている。

★77　ガリ版文化史 ： 手づくりメディアの物語 / 田村紀雄, 志村章子 編著. 新宿書房, 1985.3　【PE23-6】

国立国会図書館内限定

「手による印刷」としてのガリ版に注目し、ガリ版と人びとの関わりの歴史を紹介する本。時代とともに印刷業界の主流はタイプ印刷、写植、オフセットへと移行していったが、謄写技術もすぐには衰退せず、多様な製品が生み出された。この本が書かれた当時の昭和 60（1985）年に大ヒット商品となっていた「プリントゴッコ」は、そうした謄写技術の進化系といえるものである。

78　ガリ版ものがたり / 志村章子 著. 大修館書店, 2012.3　【PE71-J22】

ガリ版は、明治 27（1894）年に最新の国産事務用印刷機として世に出てから、昭和 35（1960）年ごろまでを最盛期として、全国の役所や教育現場、また文芸・芸術活動の分野などで広く用いられた。展示資料は、そのような歴史の中にあるガリ版と人びとのエピソードを紹介している。ガリ版が、足尾銅山鉱毒事件の被害を受けた住民たちによってビラなどの宣伝物を印刷する際に利用されており、彼らの抵抗運動の道具になっていたことなども、展示資料では紹介されている。

79　誉写印刷工作法 / 孙黻铨编辑. 誉印出版社, 1951.4　【XP-A-84915】

ガリ版は、漢字の筆写に必要な労力を大幅に削減できることから、中国においても広く普及した。戦前には、上海、天津等に出張所を置く堀井謄写堂の「謄写版」が多く

輸入され、中華人民共和国の成立（1949 年）以降は国内で製造されるようになった。展示資料は、ガリ版印刷技術を解説した中国語資料であり、中国各地のガリ版印刷所による作例を多数収録している。その中には、かつて堀井謄写堂の天津出張所に勤務していた李紹甲の作品も含まれている（p.36 ほか）。

★80　南島雑話 一 / 永井竜一 編. 白塔社, 昭和 8　【249-248】

インターネット公開

奄美大島の文化を、豊富な絵入りで紹介した本。南島研究のバイブルとも言われる重要な文献である。原本は近世期に書かれた稿本で、展示資料はその写しをもとにガリ版で自費出版され流通した。この出版は相当な赤字であったと言われており、小規模な設備で印刷可能なガリ版だからこそ実現したのかも知れない。展示箇所は「駝龍」というワニのような生き物が海辺に現れ、退治したという逸話の場面。

★81　学級通信・学級新聞活動入門 / 戸塚廉, 川合章 編. 明治図書出版, 1969　【FC61-6】

館内／図書館・個人送信

学級通信・学級新聞づくりの実践を紹介した本。
ガリ版は教育現場で長く使用され、教師が児童・生徒や保護者向けに作成する学級通信などの配布物を作るために使われた。展示資料そのものはガリ版印刷ではないが、展示箇所などに学級通信の例が掲載されている。

★82　週刊読売 36(47)(1519);1977・11・5「マネのできない独創製品で勝負」 / . 読売新聞社, 1977.11　【Z24-16】

国立国会図書館内限定

「プリントゴッコ」をご存じだろうか。昭和 52（1977）年から平成 20（2008）年まで販売された家庭用の小型プッシュ式カラー印刷機である。年賀状などの作成で使われた方もいるかもしれない。プリントゴッコは、熱光線で文字や図を原紙に焼付け、インクを押し出して印刷する。この仕組みにより、使いたい図案がそのまま印刷できた。展示資料は、プリントゴッコが発売された年に発行された『週刊読売』の記事で、当時の人気ぶりが読み取れる。

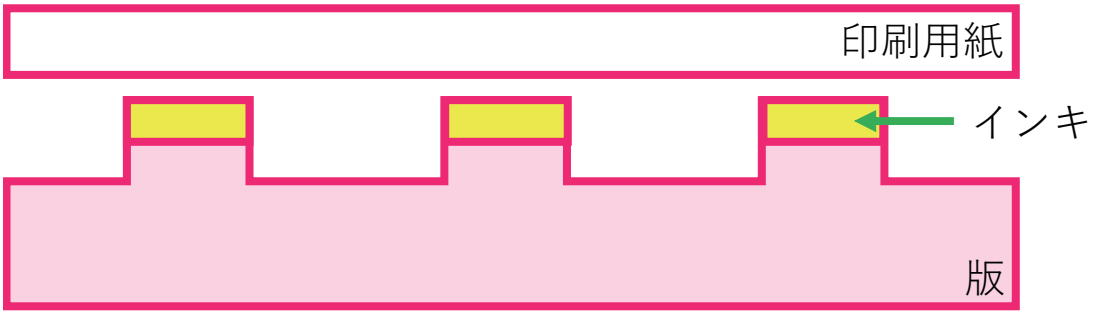
★83　『プリントゴッコ』のハイテクニック ： 新版画･サーマルグラフの魅力 / 谷本亮輔 著. 美術出版社, 1989.10　【KC445-E1】 館内／図書館・個人送信

プリントゴッコに触れたことのある人は、プリントゴッコでこんなにきれいな作品を作れるのかと驚くかもしれない。展示資料はプリントゴッコでハイレベルな作品作りをするためのテクニックを紹介する。

「この機器の可能性の範囲を探ってみたく、思いつくままにあらゆる技法を手当たり次第に試してみました。その都度「これはいけるぞ」と、そのおもしろさにのめりこんでいったのです。」と著者は述べている。

印刷方法の解説

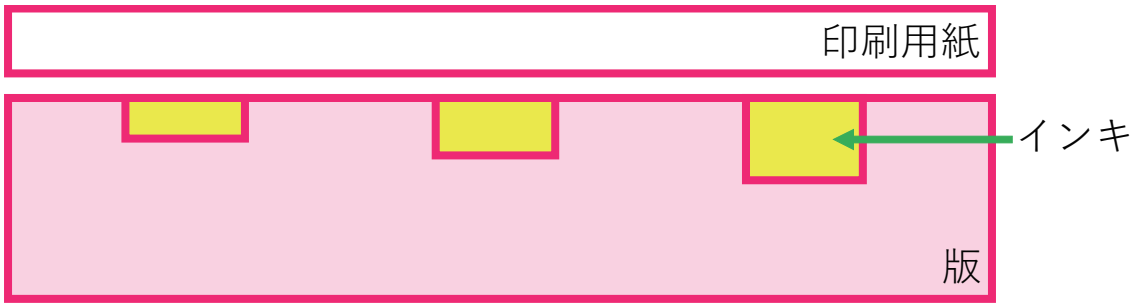
凸版印刷



版の印字部が凸になっており、そこにインキをつけて印刷する。

例：木版印刷、活版印刷、写真凸版

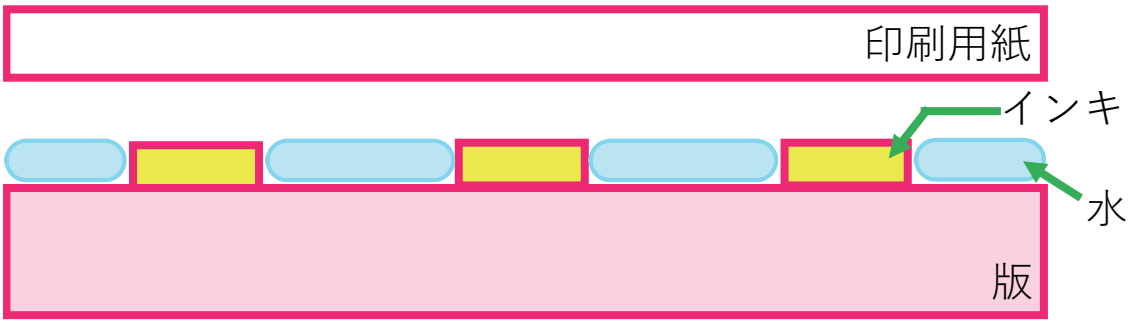
凹版印刷



版の印字部が凹になっており、くぼみにインキを盛って刷る。

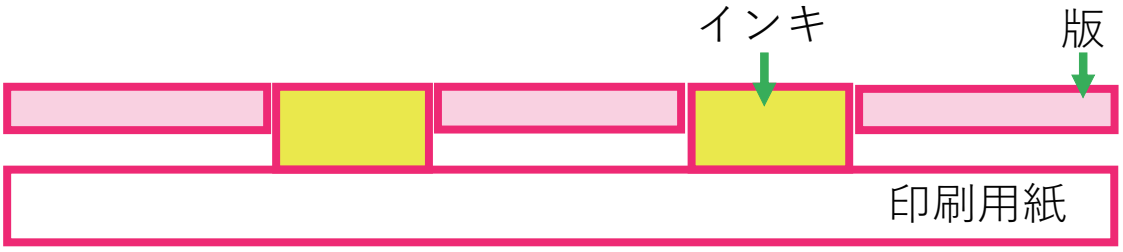
例：グラビア印刷、銅版印刷

平版印刷



版の印字部と非印字部が同一平面上にある。
水と油の反発等を利用して、印字部にのみ
インキをつけて印刷する。
例：石版印刷、オフセット印刷

孔版印刷



版の印字部が穴になっていて、そこを通した
インキで印刷する。
例：謄写印刷（ガリ版）

会期：令和７年9月18日（木）～10月14日（火）
会場：関西館 閲覧室
発行：国立国会図書館
編集：国立国会図書館関西館 資料展示班